

令和7年度版

介護現場における業務改善

モデル事業所事例集



チーバくん

千葉県介護業務効率アップセンター

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P.2

モデル事業所とは・・・・・・・・・・・・・・・・ P.3

01 施設系 見守り支援機器・記録システム

特別養護老人ホーム 柏きらりの風・・・・・・・・ P.6

02 施設系 入浴リフト（入浴・移乗）

特別養護老人ホーム 中郷記念館・・・・・・・・ P.8

03 施設系 移乗支援機器・入浴支援機器

九十九里ホーム飯倉駅前特別養護老人ホーム
シオン・・・・・・・・・・・・・・・・ P.10

04 居宅系 訪問ルート支援機器・情報共有ツール

たすけあい訪問介護センター・・・・・・・・ P.12

05 居宅系 ケアプラン作成支援・データ提供支援機器

のぞみ会居宅介護支援事業所・・・・・・・・ P.14

06 居宅系 ケアプラン作成支援・議事録支援機器 等

株式会社ノバ・メディクス・・・・・・・・ P.16

参考資料

伴走支援取り組み事業所について・・・・・・・・ P.18

はじめに

介護現場における業務改善の意義について

現在、介護サービスを取り巻く環境は、利用者の高齢化や要介護度の重度化、ニーズの多様化への対応が求められる一方、生産年齢人口の減少に伴い、人材の確保が一層困難となっています。また、利用者の尊厳保持や自立支援につながるケアの実現を図ること、介護現場で働く方々が自信と誇りを持って働くことができるようにすることも重要な課題です。

限られた人材・時間・資源の中で、質の高い介護サービスを安定して提供し続けるためには、職員が利用者と直接関わる時間、いわゆる「直接介護」の時間を十分に確保することが必要です。そのためには、書類作成や記録、移動等の「間接業務」の効率化を図るなど、業務改善の取り組みを着実に進めることが求められます。

このような背景のもと、千葉県では令和7年度に、業務改善の取り組みを通じた職場環境づくりを推進し、現場の負担を軽減しつつ介護サービスの質の維持・向上を図る「モデル事業所の養成」等の取り組みを実施しました。

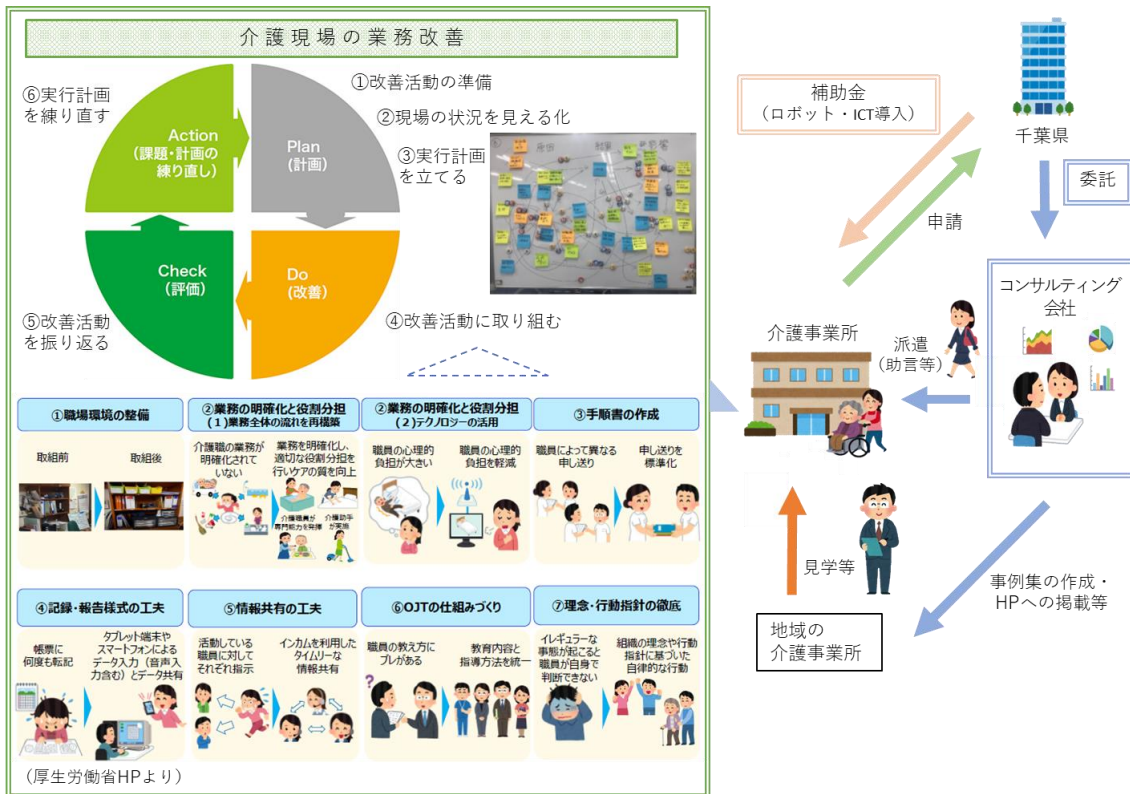
本事例集では、モデル事業所の具体的な取り組み内容・成果・メッセージ等を取りまとめています。各事業所において、業務改善の取り組みを進める際の参考としてご活用いただければ幸いです。



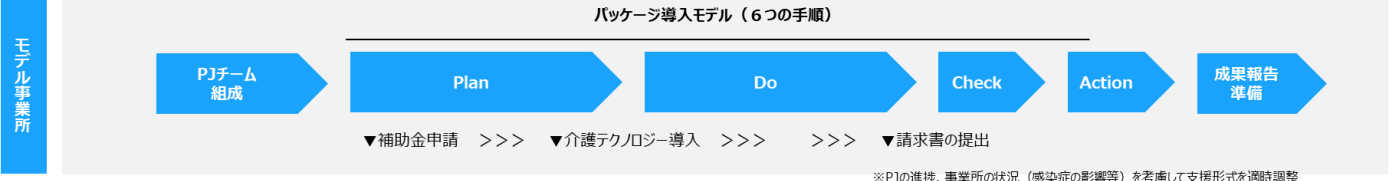
モデル事業所とは？

■ モデル事業所の養成事業概要

- 千葉県の高齢者保健福祉圏域である9つの各圏域において、業務改善の取り組みを通じた職場環境づくりについて、けん引役となるモデル事業所を養成し、地域の取り組みを促進することを目的としています。
 - 各圏域に施設系・居宅系事業所の1事業所ずつを選定しています。その内、令和7年度は3圏域（東葛北部、香取海匝、君津）で計6事業所を養成しています。
 - モデル事業所は介護テクノロジー導入等によって業務改善を図るとともに、周辺事業所からの見学受け入れなどにより業務改善の普及につなげていく取り組みも行う予定です。



4月 >>> >>> >>> >>> >>> >>> >>> 3月



モデル事業所とは？

■ 令和7年度モデル事業所の所在エリア

東
葛
北
部

施設系

特別養護老人ホーム柏きらりの風

居宅系

のぞみ会居宅介護支援事業所

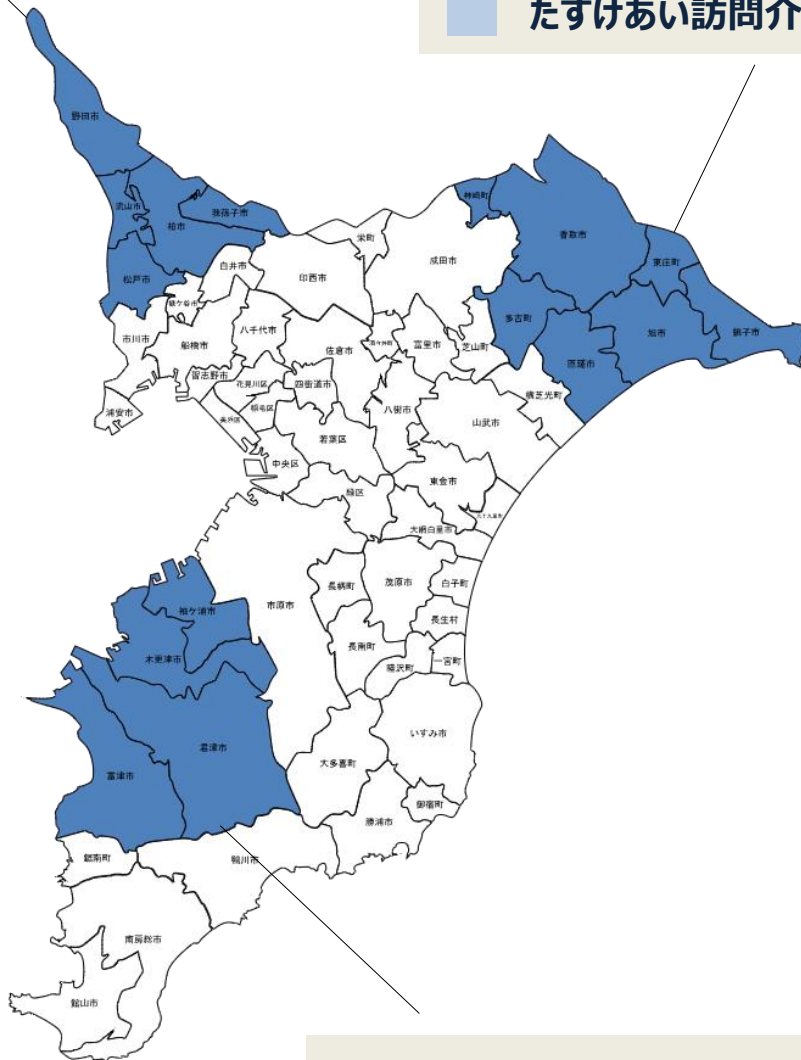
香
取
海
匝

施設系

九十九里ホーム飯倉駅前特別養護老人ホームシオン

居宅系

たすけあい訪問介護センター



君
津

施設系

特別養護老人ホーム中郷記念館

居宅系

株式会社ノバ・メディクス

事例一覽

特別養護老人ホーム柏きらりの風

(柏市・東葛北部圏域)

■ 事業所データ

- ・ サービス種別：介護老人福祉施設
- ・ 所在地：柏市西原2-9-1
- ・ 入居者数：80名（10ユニット）
- ・ 職員数：80名（常勤 52名、非常勤 28名）




■ 取り組みの概要

- ・ 夜間の訪室回数が多く、夜勤者の身体的・精神的負担が課題だったため、見守り支援機器「眠りSCAN」を40台追加導入した。センサーによる見守りを全室導入し、利用者の状態をタブレット画面上で確認できるようにすることで、これまで必要だった訪室による目視確認を減らし、訪室回数を削減した。加えて、「眠りSCAN」で取得した睡眠データを分析し、昼夜逆転傾向のある利用者を顕在化した。そして、当該利用者に対し日中の活動量を増やす支援を行うことで、睡眠リズムの安定化を図るなど、「ケアの質の向上」にも取り組んだ。
- ・ また、業務アドバイザーによる伴走支援を通じて、慣例的に実施していた早番・夜勤者間の対面による申し送り業務を見直した。既存の介護記録ソフト「ほのぼのNEXT」の記録機能及び、ビジネスチャット「direct」のチャット機能を活用し、口頭中心の引継ぎからシステムを介した情報共有へと転換することで、申し送りに伴う、残業時間の削減を図った。

■ 取り組みのポイント

- ・ 【負担軽減とケアの質向上】 夜間の見守りに関する身体的・精神的負担軽減を目的として導入した「眠りSCAN」の睡眠データを活用し、利用者の睡眠リズム改善まで踏み込むことで、負担軽減と「ケアの質の向上」を同時に実現した。
- ・ 【記録業務の効率化】 事業所内のDX委員会だけでは取り組み切れなかったが、伴走支援による第三者の視点を取り入れることで慣例化していた申し送り業務をシステム化でき、残業時間を削減した。

■ なぜ「見守り支援機器」の業務改善に取り組んだのか

 プロジェクトリーダー 岡田さん（副施設長）

夜間巡回を1時間に1回行う中で、入居者の安眠を妨げてしまうことや、深い眠りの状態での排泄介助が拒否につながることを課題と感じていました。入居者一人ひとりの生活リズムや覚醒の兆しに寄り添った支援を行いたいという思いから、全床に眠りSCANを導入しました。

必要なときに必要な支援を行うことで、安心して眠れる環境づくりと、職員の負担軽減の両立を目指しました。



■ 「見守り支援機器」の活用にあたっての課題と工夫した点



DX委員会委員長 遠藤さん

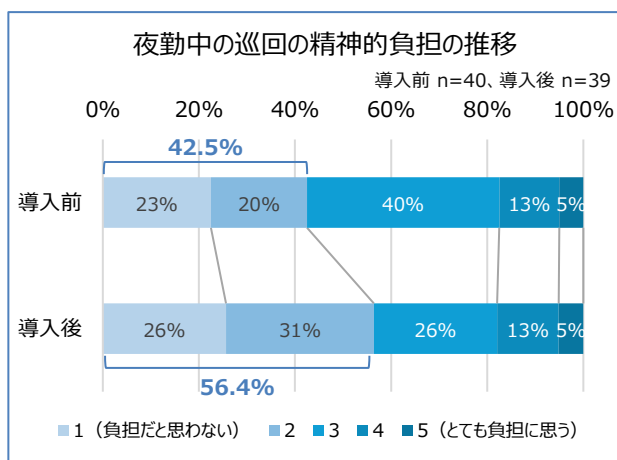
- 【課題1】 ICTが苦手意識のある職員への対応**
 - 操作説明だけでなく、導入理由やメリットを十分に説明することで、興味を持ってもらいました。
- 【課題2】 アラート音が頻繁に鳴ってしまい、本当に必要な通知の埋没**
 - アラート設定を利用者ごとに見直し、必要な通知に絞ることで業務負担の軽減を図りました。また、アラート音を必要に応じて変更することにより、必要な通知が埋もれないように工夫しました。
- 【課題3】 夜間の睡眠・生体データの日中ケアへの活用不足**
 - 夜間の睡眠データや呼吸・心拍データを日中のケアに活用し、生活リズムの改善につなげることで、業務効率化とケアの質向上の両立を実現しました。

■ 数字で見る「業務改善」の成果



成果指標：身体的・精神的負担感
申し送りのための残業時間

- 「眠りSCAN」の活用により、夜間の巡回に関して精神的負担と感じない職員の割合が42.5% ⇒ **56.4%**へ増加した。
- 既存の「ほのぼのNEXT」「direct」の機能を活用することで、申し送りに関する準備と申し送りに要する時間を一人当たり約**30分/日削減**した。



■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



DX委員会委員長 遠藤さん

業務改善やテクノロジー活用は、特別な施設だけが行うものではありません。私たちも、夜勤職員の負担軽減という身近な課題から取り組みを始めました。見守り支援機器の導入により、業務の効率化だけでなく、睡眠データを活用したケアの見直しにつながり、利用者の生活リズムの安定という成果も得られています。

テクノロジーは「人の代わり」ではなく、「人のケアを支えるための道具」です。まずは、小さな課題から、現場に合った形で一步踏み出してみることが、業務改善への第一歩になると考えています。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	「眠りSCAN」を40台追加導入
7月	事業所の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成（～11月）	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

特別養護老人ホーム中郷記念館

(木更津市・君津圏域)

■ 事業所データ

- ・ サービス種別：介護老人福祉施設
- ・ 所在地：木更津市井尻951
- ・ 入居者数：104名（多床室50名、個室54名）
- ・ 職員数：約90名（常勤50名、非常勤40名）



■ 取り組みの概要

- ・ 身体の露出を伴う介助を複数職員で実施することに対する**身体的・心理的負担の軽減**及び**入浴にかかる業務人数を減らす**ことを目的として、**特殊浴室に「SOEL-CX（天井走行リフト）」**を導入した。導入前は、「車いす」と「特浴ストレッチャー」間の移乗を複数人で実施していたが、リフトを活用することにより1人での移乗が可能になった。
- ・ 多くの職員が天井走行リフトを活用するために、
 - ① リフトの利用が得意な職員が**苦手な職員をサポート**すること
 - ② **リフトを使う前提の業務体制に再設計**すること等の工夫を行い、現場職員の理解を得ながら、円滑に導入を進めた。
- ・ リフトの活用により入浴介助時間を概ね80分削減でき、その分の時間（人員）をユニット内の利用者へのケアに充てることができた。

■ 取り組みのポイント

- ・ **【業務体制構築】** テクノロジーを「使わない職員」が出ないように、リフトを使用する前提の業務体制を構築した。
- ・ **【介護技術向上】** 介護テクノロジーの活用を介護技術の一環と位置付けることにより、積極的に使いこなそうとする雰囲気醸成した。

■ なぜ「移乗支援機器」の業務改善に取り組んだのか



プロジェクトリーダー 大崎さん

当施設個室型は3階建てで、各階に9名規模のユニットが2つ配置されています。しかし、特浴は1階にしか設置されていないため、3階から1階の特浴を利用する際の対応を2人介助で対応するケースが多く発生し、離れたところを守る職員配置が必要でした。

こうした状況の中、施設が掲げるノーリフトケアの方針や、浴室での移乗を1人で安全に実施したいとの声、また、機器展示会での情報も契機となり、業務改善を検討しました。



利用者の体格に関わらず無理なく移乗でき、職員の経験や体力に関わらず介助ができる。

■ 「移乗支援機器」の活用にあたっての課題と工夫した点



ユニットリーダー 江澤さん

・【課題】 機器選定におけるリスクの考慮

➤ 浴室の特性上、濡れた床面での機器使用にリスクがありますが、業者の方と検討を重ね、可動式ではなく固定式を選びました。事業者が抱える課題を解決するためには、コミュニケーションを重ねることが大切で、繰り返し対話をしていくことを意識しました。

※前年度に居室等での移乗を安全に行えるようリフトを導入しました。その際は、デモを繰り返し部署から「これが必要」という声が上がって導入しました。このような経緯があったので、導入に関しては職員が求めているものとしての土壌があり、周囲の理解のもと導入が進められました。

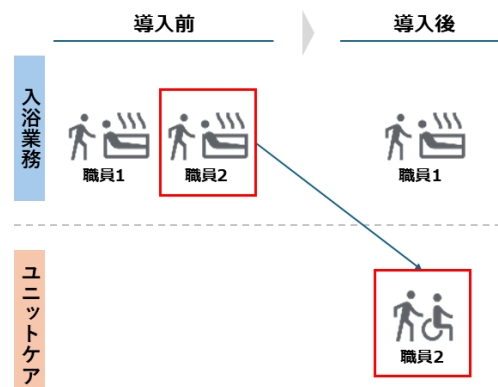
■ 数字で見る「業務改善」の成果



成果指標：空いた時間（人員）数

- ・ リフトの活用に伴い、入浴介助に従事する職員数が2人から1人に減少した。その結果、入浴業務（移動・移乗を含む）に従事する職員の時間をユニットケアの時間に充てることができ、1人あたり10分程度のユニットケアの時間を創出した。
- ・ リフト活用に伴い、入浴介助の身体的・精神的負担軽減並びにユニットでのケア時間の創出につながり、数値では表せないもののユニットケアの考え方に近づいた業務改善が実行できた。

入浴業務における介助職員数の変化
(前提条件：特浴・1日4名対応)



■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



入所介護グループチーフ 市川さん

今回、介護テクノロジー導入に取り組みましたが、介護現場では業務改善をする上で「改善」を「変化」と捉えて消極的になる傾向があります。慣れたやり方から変えることは大変ですが、「変えることでどのような状況になるのか」をイメージしてもらうことが重要だと今回の取り組みで感じました。

また、以前に業務改善研修の中で「U字の法則」*を知ることができたことも取り組みを進めていく中で重要だと感じました。これからも変化を恐れず、一歩先の介護を共につくっていきましょう。

*「U字の法則」：不慣れたテクノロジー導入や業務手順の変更により、取り組み当初は業務効率が下がるが、経験値の蓄積により業務効率が取り組み前よりも向上すること。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	SOEL-CX(天井走行リフト)を導入
7月	事業所の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成（～11月）	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

九十九里ホーム飯倉駅前特別養護老人ホームシオン（匝瑳市・香取海匝圏域）

■ 事業所データ

- ・ サービス種別：介護老人福祉施設
- ・ 所在地：匝瑳市飯倉95番地1
- ・ 入居者数：60名（従来型）
- ・ 職員数：63名（常勤39名、非常勤24名）



■ 取り組みの概要

- ・ 移乗支援機器「Hug」が2フロアに対して1台のみだったことから、利用調整や機器移動に時間を要し、直接的なケアに関わらない**間接業務が増加**していることが課題だった。また、入浴介助業務においては身体的負担を感じる職員が多く、負担の軽減が求められていた。
- ・ 上記課題を踏まえ、**移乗支援機器「Hug」を追加導入**することで、機器確保に伴う**移動時間の削減**を達成した。また、利用者のトイレでの排泄介助にあたってHugを利用することにより、一人で介助することが可能になり、**見守り時間を生み出す**ことを目指した。
- ・ 加えて、**入浴支援機器「ピュアット」を導入**し、洗身時の**職員の身体的負担を軽減**するとともに、**利用者の皮膚トラブルの防止**にもつなげる取り組みを進めた。
- ・ これらの機器導入を通じて、業務効率化と職員負担の軽減を図りながら、利用者の活動量を増やすなどの、自立支援のケアを実践する時間が増え、ケアの質の向上が実現した。

■ 取り組みのポイント

- ・ **【移動時間削減・一人介助の実施】** 既存の移乗支援機器を追加導入することで、機器の貸し借りで生じる移動時間の削減ができ、また二人介助で行っていたトイレでの排泄支援が機器の導入で、一人介助で対応できるようになった。
- ・ **【入浴オペレーション改善】** 入浴支援では機器導入のほか、入浴のオペレーション見直しも同時に実施し改善を図った。

■ なぜ「移乗支援機器・入浴支援機器」の業務改善に取り組んだのか



プロジェクトリーダー 斎藤さん

職員からの困りごとを書いてもらった気づきシートの記載から介護現場ではフロアでの見守りが十分にできていないという意見が挙がりました。

特に、当施設では日中のトイレでの排泄を目指しているため、フロアで見守りを実施しながら、必要な場合は二人介助でトイレ誘導、介助を行っていました。そのため、フロアでの見守りが十分にできていないと感じていたことから、間接業務を改善し、時間を生み出すことでフロアでの見守り時間が少しでも確保できるのではないかと検討しました。

■ 「移乗支援機器・入浴支援機器」の活用にあたっての課題と工夫した点



リーダー 土屋さん

・【課題】 入浴支援機器導入に向けた職員への浸透が不十分

- ▶ デモ時には機器導入に対して戸惑いも見られましたが、入浴のオペレーションを変更したうえで、繰り返し使用方法や効果について説明することで、職員間の理解を深めました。
- ▶ 機器メーカーによる操作説明や、指導が可能となった職員による繰り返しのレクチャーを実施した結果、多くの職員が不安なく介護テクノロジーを活用できるようになりました。

※移乗支援機器の導入については、多くの職員が望んでおり、現場に導入した翌日からしっかりと活用できました。

■ 数字で見る「業務改善」の成果

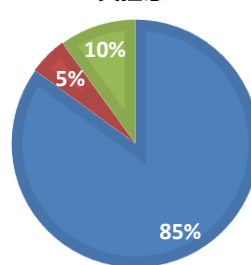


成果指標：移動回数、移動距離、身体的負担感

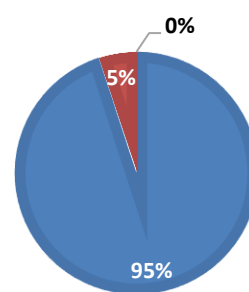
- ・「Hug」の追加導入に伴い、**機器の移動回数が12回削減、1日平均移動距離は660m削減、時間は7分30秒削減**した。創出された時間で、フロアの見守りを行う時間が増えた。
- ・「ピュアット」の導入により、入浴業務に関する**身体的負担を感じる職員が10%に低下**した。

機器導入後の身体的負担の変化

ピュアット導入後の負担感



HUG導入後の負担感



■ 負担が軽減した
■ 変わらない
■ 大変になった

■ 負担が軽減した
■ 変わらない
■ 大変になった

■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



リーダー 土屋さん

課題が多くある場合には、自分たちでできるところから取り組んでみるといいと思います。

小さな成功体験を重ね、業務改善を継続していくことで、職員の負担軽減もでき、利用者様へのケアが少しでも充実したものになっていくのではないかと思います。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	「Hug」1台、「ピュアット」2台を導入
7月	事業所の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成（～11月）	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

たすけあい訪問介護センター

(香取市・香取海匠圏域)

■ 事業所データ

- ・ サービス種別：訪問介護
- ・ 所在地：香取市岩部1095-1
- ・ 利用者数：59名
- ・ 職員数：8名（内訳：常勤6名、非常勤2名）



■ 取り組みの概要

- ・ 年度当初に伴走支援者とともに実施した「因果関係図づくり」において、洗い出した「**間接業務にかかる時間が多い**」という課題に対して解決策を実行し、利用者へのサービスの質は変えることなく、サービス責任者をはじめとする職員の負担を減らした。
- ・ 具体的には、サービス責任者が実施していた「シフトの作成」や「作成したシフトのホワイトボードへの転記」という業務が負担だったため、
 - ① **訪問ルート最適化システムである「ZEST」の導入**
 - ② PCで作成したシフトを転記することなく、接続するのみで大画面に投影できる**デジタルディスプレイの導入**
 - ③ **介護ソフト「CARE KARTE」付属のケアコネ（チャットツール）の活用**による職員間の円滑なコミュニケーションや情報共有を行った。

■ 取り組みのポイント

- ・ **【第三者による支援】** 伴走支援による「第三者の視点」が入ることでホワイトボードへの転記等の慣例化していた業務の効率化に成功した。
- ・ **【チャットツール活用】** 利用者家族への情報共有を紙媒体で実施していたが、チャットツールにて共有することに同意をいただいた上で、紙媒体での情報共有をなくした。

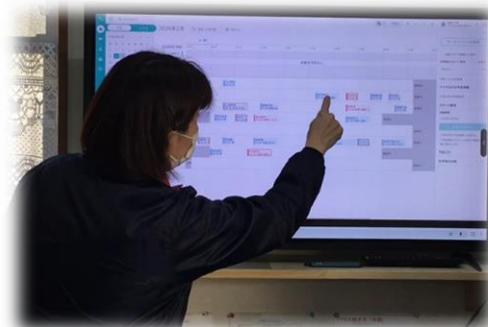
■ なぜ「訪問支援機器・情報共有ツール」の業務改善に取り組んだのか



プロジェクトリーダー 佐久間さん

訪問予定の作成はソフトを導入していましたが、すべてを手動で行っており、時間がかかっていました。また、職員間での予定共有は、ホワイトボードに転記し写真をとって共有するなど、訪問予定のためかなりの時間を費やしていました。

訪問予定が誰でも作れるようになり、ホワイトボードの転記の時間を削減できればと考えました。



■ 「介護業務支援機器・情報共有ツール」の活用にあたっての課題と工夫した点



管理者 佐藤さん

・【課題】 訪問予定作成ソフトの変更に対する苦慮

- ソフトを繰り返し使用することで慣れていきました。また、予定を何度も転記する手間がなくなり、業務の効率化につながりました。

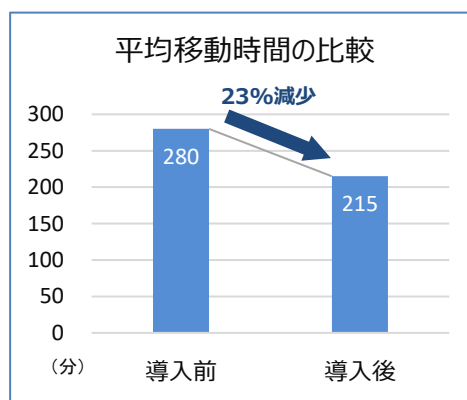
※情報共有の電子化にあたり、ご家族や利用者様の理解を得られるか不安でしたが、特段の混乱なく、すんなりと電子化に納得してもらい移行することができました。なお、当事業所との情報共有のためにチャットツールの利用を希望するご家族もいました。登録ができない等の理由により普及は拡大していませんが、少しずつ増えてきています。今後は、こうした点についてもサポートができればと考えています。

■ 数字で見る「業務改善」の成果



成果指標：移動時間、記録用紙枚数

- ・ ZESTの活用により訪問ルートが最適化され、**移動時間が23%減少**した。また、特定職員に偏っていた**訪問先の担当者の変更・分散にも成功**した。
- ・ 介護記録を電子化することで、記録用紙の削減に成功した。その結果、記録用紙の保存の必要がなくなったので、業務ペースが広がった。



■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



プロジェクトリーダー 佐久間さん

記録の電子化については、利用者やご家族に理解を得られるか、また記録の控えがなくなることへの不安などから、これまで進めることができずにいましたが、今回の取組がきっかけとなり、電子化を進めることができました。実際に導入してみると考えていたような混乱はなく、また先入観から大変だと思っていた入力業務も、慣れてくるとタブレットでの入力の方が楽だと感じる職員が多く、電子化にして良かったと感じています。今後はチャットツールを普及させ、ご家族や他事業所との情報共有をより円滑にできるようにしていきたいと思えます。

最初は、今までやっていた事がなくなる不安や抵抗感がありましたが、「まずはやってみる」を合言葉に全員で取り組むことが大切だと感じました。これから取り組みをされる皆さんもぜひ一歩踏み出してみてください。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	ZEST（訪問事業所向け介護業務支援機器）等を導入
7月	施設の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成（～11月）	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請 利用者家族に紙廃止等について説明	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

のぞみ会居宅介護支援事業所

(松戸市・東葛北部圏域)

■ 事業所データ

- ・ サービス種別：居宅介護支援
- ・ 所在地：松戸市高塚新田269
- ・ 利用者数：155名
- ・ 職員数：6名（常勤5名、法人兼務事務1名）



■ 取り組みの概要

- ・ 訪問後の記録作成やケアプラン作成に多くの時間がかかり、さらに日々届く大量の書類の仕分けや保管、検索に追われる状況が続いていた。書類が減らず、探す時間もかかり、精神的な負担も大きくなっていった。
- ・ この課題に対して、AI分析・ケアプラン作成ツール「SOIN（ソワン）」を活用し記録作成を効率化するとともに、書類自動仕分けシステム「クロジカAI書類管理」を導入し、書類管理の一元化と検索時間の短縮を図った。加えて、複合機と連携し、FAXのデジタル化・ペーパーレス化を進めた。
- ・ その結果、記録作成や書類検索にかかる時間が短縮され、月末業務の負担も軽減した。何より、書類に追われる感覚が減り、気持ちに余裕が生まれた。

■ 取り組みのポイント

- ・ 【テクノロジー組み合わせ・業務フロー見直し】 AI分析・ケアプラン作成ツール「SOIN」と、書類仕分けを自動化する「クロジカ」を組み合わせ導入・活用した。記録作成から大量の書類仕分け、さらに複合機と連携したFAXのデジタル化まで、一連の業務フローを全面的に見直した。

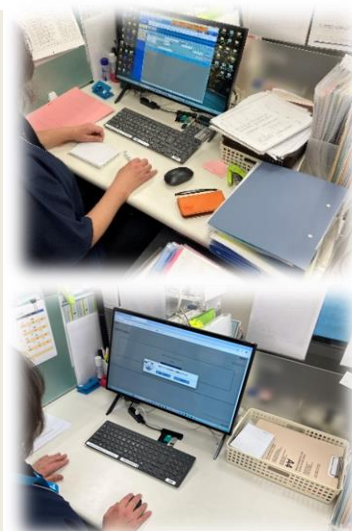
■ なぜ「ケアマネ業務支援機器」の業務改善に取り組んだのか



ケアマネジャー

ベテラン層ほど膨大な書類業務が精神的負担となり、「もう無理かなあ」と退職を考えざるを得ない状況がありました。若手職員も支援業務を覚えながら書類作成に追われ、業務に余裕を持たず負担が大きい状態でした。

こうした状況を改善するため、音声から記録を自動作成できるAIツール「SOIN」と、書類を自動仕分けし検索時間を短縮できる「クロジカ」を導入しました。記録作成と書類管理の負担軽減を図り、職員が安心して働き続けられる環境づくりを目指して取り組みを始めました。



導入前

データ化で作業
がしやすく

導入後

■ 「介護業務支援機器」の活用にあたっての課題と工夫した点



ケアマネジャー

- 【課題1】 SOINについて、使い方や指示文が分からず活用が難航**
 - マニュアルや手順書を整備し、入力方法や独自の指示文を統一することで、誰でも同じように活用できる体制を整えました。
- 【課題2】 クロジカについて、PDF化してから取り込む必要性および、どの書類を登録すべきか不明瞭**
 - 必要書類の基準を明確化し、手順書を作成しました。PDF化の課題をきっかけに複合機の機能活用も進み、結果としてペーパーレス化の推進にもつながった。

■ 数字で見る「業務改善」の成果



① 業務改善の成果 (Before (11月) → After (1月))

項目	内容
提供票の印刷・発行枚数	722枚 → 0枚 (完全データ化)
提供票関連の作業時間	6時間35分 → 3時間10分
モニタリング記録作成時間 (利用者1名分)	25分 → 12.5分
新規アセスメント作成時間 (利用者1名分)	4.5時間 → 2.75時間
書類整理・ファイル整理時間 (ケアマネ1名あたり/月)	4.5時間 → 1.5時間
郵送関連コスト	14,746円 → 0円

② 精神的・対人支援の成果

項目	内容
精神的負担の軽減	記録の抜け漏れや記憶違いへの 不安が大幅に軽減した 記録業務の安心度： 1.2→4.8 (5点満点)
利用者との関わり	利用者と目を合わせて話す時間が増加した 利用者とのコミュニケーションの充実度： 1.6→4.8 (5点満点)
業務への集中	書類作成・整理の負担が減り、業務に集中できる余裕が生まれた

③ ICTに対する意識の変化

項目	内容
導入前の意識	ICTは難しいという先入観があった
導入後の実感	実際に使う中で、業務に十分活用できると認識した
定着状況	チームで改善を重ね、業務に自然に定着した

■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



のぞみ会居宅介護支援事業所 ケアマネ全員より

「ICT知識ゼロ！50代・60代の私たちでもできました！」

テクノロジーと聞くだけで身構えてしまい、最初は不安で一歩が踏み出せませんでした。でも、実際に使ってみると想像していたよりずっと分かりやすく、紙の整理や書類作成に追われていた毎日に、少しずつ余裕が生まれました。今では、業務を支えてくれる心強い存在です。

ケアマネの仕事は好きなのに、書類の多さで気持ちが折れそうになる。そんな現場は、きっと私たちだけではありません。だからこそ、働き方を少し変えることが、職場を守ることにつながると感じています。無理のない形で、仲間が安心して長く働ける環境を一緒につくっていきませんか。

気になることがあれば、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	「SOIN」、「クロジカ」を導入
7月	事業所の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成 (～11月)	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

居宅介護支援 ノバ・メディクス

(君津市・君津圏域)

■ 事業所データ

- サービス種別：居宅介護支援
- 所在地：君津市東坂田4-8-23
- 利用者数：205名
- 職員数：13名 主任介護支援専門員 4名（内1名管理者兼務）介護支援専門員1名 計5名



■ 取り組みの概要

- ケアマネジャーが担う「利用者の初回訪問からサービス事業所との連携」までの業務において、**記録作成やケアプラン作成等を手書きで行っており、多くの時間を要していたことに加え、提供表の送付に係る精神的負担が大きかった**。そこで、手書きによる業務運用を見直し、テクノロジーを活用することで業務の効率化を図った。
- 利用者への初回訪問時において、介護業界向けの**議事録・記録作成ツール「noman」**を導入し、紙による記録をデジタル化したことで、**職員1人当たり13時間/月の業務削減につながった**。また、現場事業所への連絡については、従来FAXにより実施していた**連絡業務を「Sapon」**により代替することで、同様に職員の業務負担軽減につながった。さらに、ケアプラン作成にあたっては、**ケアマネジメント支援システム「SOIN（ソウン）」**を活用し、記録システム「ワイズマン」への入力作業の効率化及び新しい視点や気づきの機会となり、**ケアプラン内容の質的向上**につながった。

■ 取り組みのポイント

- 【業務フローのデジタル化による効率化実現】** 記録・ケアプラン作成や事業所連携に時間を要していた手書き業務に対し、「noman」、「SOIN（ソウン）」、「Sapon」を組み合わせ導入・活用し、初回訪問時記録からケアプラン作成、事業所連携までの業務フローを一体的にデジタル化・効率化したこと。

■ なぜ「ケアマネ業務支援機器」の業務改善に取り組んだのか



管理者 主任介護支援専門員 藤井さん

元々、柔軟な考えでチャレンジ精神に満ちた介護支援専門員が集まっている居宅介護支援事業所ではありましたが、私たちのモットーである「ご利用者及びご家族に寄り添いたい」「記録に時間をかけるのではなく、ご利用者とご家族と実りのある対面時間を少しでも長く共有したい」と考えデジタル化・効率化にチャレンジしました。



何かお困りでしょうか？
該当する項目を以下より選択してください

- 様の居宅サービス計画書_第1表について
- 介護等に関するご質問

■ 「介護業務支援機器」の活用にあたっての課題と工夫した点



主任介護支援専門員 中村さん

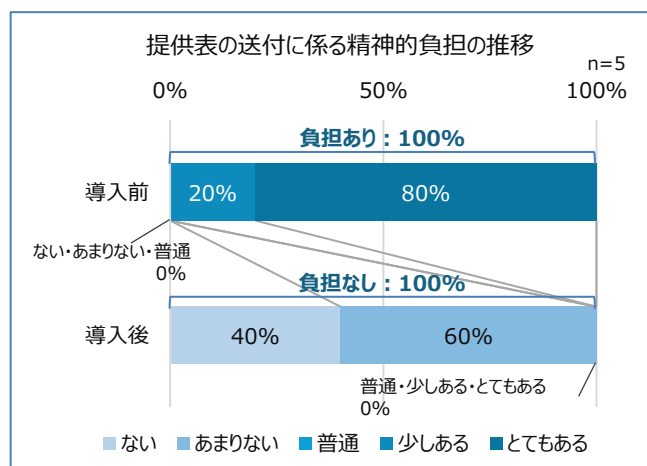
- 【課題1】 利用者の意向を十分に反映したケアプラン作成**
 - SOINのプロンプト（指示内容）を工夫することで必要なアウトプットを引き出せる可能性があるため、PC操作に慣れた職員を中心に活用方法の検討を進めています。また、作成したプロンプトを事業所内で共有し、職員間で活用できるよう工夫しています。
- 【課題2】 DXに不慣れな職員への対応**
 - 操作方法を丁寧に共有しながら活用を進めた結果、最年長の職員も使いこなせるようになり、DXが現場に定着しました。

■ 数字で見る「業務改善」の成果



成果指標：ケアプラン業務時間、用紙枚数
業務における身体的・精神的負担

- ケアマネ業務全体で約42時間の時間削減に成功した。
- FAX送付ミスやFAX漏れ等についても、「負担あり」が100%から50%となり、精神的負担の軽減につながった。
- 提供票以外の書類も紙で出力することが減り、月に約1,400枚消費していた用紙がほぼ不要となったことで、コスト削減につながった。



■ これから「業務改善」に取り組む事業所へのメッセージ



管理者 主任介護支援専門員 藤井さん

どんな困難なことも一歩踏み出してみないと、どのような未来が待っているのかは分かりません。「千里の道も一歩から」新しいことにチャレンジすることは、心配な反面、わくわくする楽しさも待っています。

1人では難しいことも、事業所の仲間である介護支援専門員や、他事業所のサービス事業所の方々、医療・行政・福祉・地域の方々、その先にいらっしゃるご利用者やご家族とともに、よりよい支援を目指して力を合わせて取り組んでいきたいと思えます。私たちケアマネジャーは、書類作成に時間をかけるのではなく、ご利用者との関わりの時間に多くの時間を充て、ソーシャルワークとして日々の相談援助に取り組むことを大切にしています。今回の業務改善事業に参加させていただいたことで、新しい未来への一歩を踏み出しました。

皆様も是非、業務改善に取り組んでいただき、介護支援専門員の醍醐味である「相談支援」の時間を今よりさらに増やすことで、日々のソーシャルワークを楽しみつつ温かみのある支援を共に地域に広げましょう。

■ 業務改善の年間スケジュール

6月	業務改善の取り組み開始宣言	11月	noman、SOIN、Saponを導入
7月	施設の課題の洗い出し	12月	業務改善後の業務時間等を測定
8月	導入計画書の作成（～11月）	1月	PJチームで取り組みの振り返り
9月	介護テクノロジー補助金申請	2月	事業所全体で取り組みの振り返り
10月	業務改善前の業務時間等を測定	3月	成果発表会で事例報告

参考資料：令和7年度伴走支援取り組み事業所について

■ 令和7年度伴走支援事業所 全体概要

- 千葉県では介護テクノロジー導入等による業務改善を進めていくため、令和6年度から介護事業所に対して、伴走支援者を派遣して業務改善の取り組み支援を行っております。
 - 令和7年度は県内25事業所に対して伴走支援を行っております。
 - 事業所種別は以下の通りであり、特別養護老人ホームや介護老人保健施設、養護老人ホーム、ヘルパー事業所など多岐にわたって支援を行っております。
 - なお伴走支援の実施にあたってはそれぞれの介護事業所の課題の明確化や、介護テクノロジーの導入や業務改善を行って効果があったのかを測るための指標設定などを行うため、業務改善研修を受講いただき、業務改善の実施に向けて理論と実践の両面から支援する仕組みになっています。
- ※ なお、本伴走支援は年度に1回の公募制となっております。



■ 令和7年度伴走支援事業の参加事業所種別

合計25事業所	
介護老人福祉施設	9施設
介護老人保健施設	5施設
特定施設入居者生活介護	3施設
訪問介護	3施設
養護老人ホーム	1施設
地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護	1施設
地域密着型特定施設入居者生活介護	1施設
特定施設入居者生活介護 (ヘルパー・居宅)	1施設
認知症対応型共同生活介護	1施設

参考資料：令和7年度伴走支援取り組み事業所について

■ 令和7年度伴走支援取り組み事業所について

施設系 服薬支援

養護老人ホーム 和陽園 (養護老人ホーム)

【概要】

配薬業務については、2人体制で実施する運用マニュアルを整備していたものの、必要な人員の確保が難しく、配薬が適切なタイミングでできないなどにより、配薬に要する時間が増加していた。そこで、**服薬支援システムを導入**することにより、配薬ミスリスク低減を図りつつ、1人でも対応可能な運用体制にしていくことを目指した。

【成果】

配薬業務に関する課題整理では、職員から意見を幅広く収集し、業務のどこに負担を生じているかを明確にすることができた。また、**翌年度に向けた業務フローの見直し案や新たな役割分担も示す**ことができ、業務改善に対する意欲向上にもつながった。

【ポイント】

施設内の課題を幅広く収集したことで、**従来の「2人体制マニュアル」にとらわれず、現場の人員状況に合わせて運用方法を再構築**できた。

居宅系 見守り支援

こころあいホーム (グループホーム)

【概要】

夜間対応に伴う業務負担に加え、事故発生への不安といった職員の心理的負担が課題となっていたことから、**見守り支援機器「aams」を導入**し、職員の心理的負担の軽減を図った。

【成果】

導入後、「夜勤業務の負担」や「訪室時に対応が間に合わないケースの発生頻度」など、複数の項目において**負担・頻度の低減**が確認された。

【ポイント】

プロジェクトメンバーには、**経営層である理事長および施設管理者**に加え、**新たなシステム導入に意欲的な職員をメンバーに含めた**。また、計画書の作成や調査等は事務職員が担う体制とすることで、**現場職員の通常業務に係る負担を可能な限り抑える**よう配慮した。

居宅系 見守り支援

パークヴィラ 陽春館 (特定施設入居者生活介護)

【概要】

特に夜間帯における業務負担が課題となっていたことから、**見守り支援機器「眠りSCAN」を導入**した。これにより、不要な訪室回数の削減をはじめ、職員の身体的・心理的負担の軽減を目指した。

【成果】

長年継続してきた業務方法の見直しに伴い、現場に混乱や戸惑いが生じたものの、**業務改善の必要性や職員にとっての機器導入意義について、丁寧に説明**を行うことで、前向きに業務改善へ取り組む体制を構築することができた。

【ポイント】

現場職員の意見を丁寧に聴取した上で、**全職員が納得感を持ちながら、施設全体で業務改善を進めた**。

千葉県 令和8年3月発行

千葉県介護業務効率アップセンター



043-216-2011



kaigochiba@kaigo-center.or.jp



<https://chiba-kaigocenter.com/>

皆様からのご相談
心よりお待ちしております！